

【 玖 珠 町 】

平成29年度 全国学力・学習状況調査結果（小学校：国語）

1 調査結果の分析

小学校：国語A

- 正答数7問以下（50%未満）の割合が、5.6%であり、本町の学力向上に係る数値目標の一つである「全国調査A問題において50%未満の児童の割合を10%未満にする」を達成できた。
- 正答数の分布を見ると、15設問中13問（正答率85%）以上の高位層の割合が37.3%を占めるなど、全体的な底上げができています。
- 設問別では、15問中8問の正答率が全国・県平均を上回っており、「読む力」「ことわざの意味と使い方」「古文による読み」に関する正答率が全国・県平均を5ポイント近く上回っている。
- 「俳句の情景を捉える」についての二問とも、全国・県平均から5～6ポイント低くなっている。俳句の授業における定着のあり方に課題が残る。
これまで取り組んできた「記述力を伸ばす」指導の更なる充実が求められる。

小学校：国語B

- 「話すこと・聞くこと・書くこと」の課題を設定した問題では、正答率が全国や県平均を大きく上回っている。日常の「書く能力」向上の取り組みが着実に成果を上げている。
- 文章と図とを関連付けて、自分の考えを書く問題の正答率が全国・県平均を上回っている。
- 正答数の分布を見ると、9設問中5問が全国・県平均を上回っている。
- 設問3（一）の「登場人物の相互関係や心情・場面についての描写を捉える（読む能力）」の正答率が72.2%で、県平均より5ポイント下回っている。
※「読む能力」の更なる充実が求められる。

2 具体的な改善方策

小学校：国語A

1 漢字や語句の定着のために

- ① 国語科の授業だけでなく、学校挙げて組織的に取り組む体制をつくり、継続的に取り組む。
- ② 漢字・語句に対する興味・関心を引き出し、繰り返しの練習をするだけでなく、様々な場面で実際に使用するよう計画的に指導する。
- ③ 国語科の授業における系統的な指導を充実させる。

2 更なる基礎力の定着・向上のために

- ① 町で独自に作成した「学習語彙集」及び、「掲示用学習語彙カード」を有効に活用し、学習語彙の定着を図る。
- ② 読みの力を更に伸ばすため、目的に応じた読み方を身につけさせる授業づくりに取り組む。

小学校：国語B

1 描写を捉える力（読む能力）をつけるために

- ① 文学的文章の単元において表現を比較する学習活動等を取り入れ、表現効果に目を向けた読み方を身につけさせる。
- ② 各校に配置している新聞等を活用して、表現の違いによる読み手の受け取り方の違いを実感させる学習活動を仕組む。

2 更なる活用力の向上のために

- ① 図書館を活用した授業に更に積極的に取り組み、複数の資料を読み比べたり、必要な情報を読み取り、自分の表現に生かしたりする活動の充実を図る。
- ② ペアやグループで読み取ったことや考えたことを自分の言葉で説明し合う場を設定し、自分の考えを再構成する経験を多く積ませる。

平成29年度 全国学力・学習状況調査結果（小学校：算数）

1 調査結果の分析

小学校：算数A

- 正答数7問以下（50%未満）の割合が、4.8%であり、本町の学力向上に係る数値目標の一つである「全国調査A問題において50%未満の児童の割合を10%未満にする」を達成できた。
- 正答数を見ると、正答率85%以上（13問／15問）の高位層の割合が59.6%を占めており、特に全問正答率が28.6%と、全体的な底上げができています。
- 「数と計算」に関する正答率が高い。
- 町で実施している確認テストで幾度と取り扱っている類題については、正答率が高く、無解答率が低い。
- 「8と12の最小公倍数を求める」問題で、無回答率が3.2%で県・全国と比較して無回答率が多い。

小学校：算数B

- 設問【4】（1）「示された条件を基に、適切な式を立てる」の正答率は81.0%で全国や県の正答率を5ポイント程度上回っている。
- 設問【3】（1）「飛び離れた数値を除いた場合の平均を求める式を判断」の正答率が75.4%で全国・県の正答率を7ポイント程度上回っている。
- 設問別では、全国・県平均を上回っているのは、11問中4問である。
- 設問【1】（3）「2けたのひき算の答えを求めることができるきまりを記述する問題」の正答率が全国・県の正答率よりも5ポイント低くなっている。

2 具体的な改善方策

小学校：算数A

- ① 指導事項を明確にした授業の更なる充実を図る。
- ② 町独自で実施している算数確認テスト（年4回）に向けた取組及びその結果を生かした補充学習の充実を図る。
- ③ 町で作成した「学習語彙集」及び、「掲示用学習語彙カード」を有効に活用し、算数科の学習語彙の定着を図る。
- ④ 具体物を用いた実感を伴う授業の工夫や、作図における操作活動等により、「図形」の特徴についての理解と技能の習得を図る。
- ⑤ 問題データベースをあらゆる場面で活用する。

小学校：算数B

- ① 授業の中で、日常生活での経験や興味・関心と関連付けながら、判断の根拠を過不足なく説明することの大切さについて、児童が実感をもって理解できる授業づくりをする。
- ② 言葉（特に習得した学習語彙）、数、式、図、表などを用いたりして、自分の考えを書いたり、説明したりする活動を重視した授業づくりをする。
- ③ 数値や文章を入れかえた多様な練習問題を繰り返し解かせる。
- ④ 学校挙げて、「書くこと」に慣れさせる活動の充実を図る。
- ⑤ 各教科において、自分の考えを書く場を設定した授業づくりに取り組む。
- ⑥ 児童のノートを計画的に点検し、表現力を把握するとともに、個に応じた適切なアドバイスを
する。
- ⑦ 児童から引き出した数学的な見方・考え方を共有したり、吟味したりする場を意図的・計画的
に設定する。

平成29年度 全国学力・学習状況調査結果（中学校：国語）

1 調査結果の分析

中学校：国語A

- 正答数32問中15問以下（50%未満）の割合が8.3%であり、本町の学力向上に係る数値目標の1つである「全国調査問題において50%未満の生徒の割合を10%未満にする」を達成できた。
- 【2一】「目的に応じて資料を効果的に活用して話す（選択）」正答率が90.2%。
【3一】「語句の使い方を工夫して書く（短答）」正答率が89.4%など、全国・県平均を1～3ポイント上回っている。
- 設問別で、正答率が全国・県平均を上回っているのは、32問中7問である。
- 正答数32設問中29問（正答率90%）以上の高位層の割合が24.2%であり、全国、県と比べて少ない。また、16問（正答率50%）以下の下位層に10.2%である。中間層及び下位層の底上げが求められる。
- 設問【1】「話し言葉と書き言葉との違い」は、全国・県平均を6ポイント下回っている。また、【4一】「文章の構成や展開について自分の考えを持つ（読む能力）」は、全国・県平均を9ポイント下回っている。

中学校：国語B

- 設問【2一】「目的に応じて資料を効果的に活用して話す」の正答率は86.4%。【2二】「聞き手が話し手に伝えようとしていること」～話す・聞く能力～は正答率78.8%で、全国・県平均を4ポイント上回っている。
- 設問では、全国・県平均を上回っているのは、9問中4問である。
- 設問【1一】【1二】「読むこと」は、国・県平均を4～5ポイント。【1三】「書くこと」は、9ポイント下回っている。文章を読み分ける能力（理解）や表現方法について理解し、自分の考えを持つことや「書く能力」が求められる。

2 具体的な改善方策

中学校：国語A

1 漢字や語句の定着のために

- ① 国語科の授業だけでなく、学校挙げて組織的に取り組む体制をつくり、継続的に取り組む。
- ② 漢字・語句に対する興味・関心を引き出し、繰り返しの練習をするだけでなく、様々な場面で実際に使用するよう計画的に指導する。
- ③ 国語科の授業における系統的な指導を充実させる。

2 更なる基礎力の定着・向上のために

- ① 指導事項を明確にした授業の充実を図る。
- ② 学校挙げて「読む・書く」基礎技能（正確に読む・速く正確に書く等）の習熟を図る取組を継続する。
- ③ 読みの力を更に伸ばすため、目的に応じた読み方を身につけさせる授業づくりに取り組む。
- ④ 基礎的事項の定着を図る家庭学習の課題を計画的に与え、習熟を図る。

中学校：国語B

- ① 全ての教科において、多様な考えを引き出す学習課題を設定し、生徒個々に自分の考えをもたせる経験を多く積ませる。
- ② ペアやグループで読み取ったことや考えたことを自分の言葉で説明し合う場を設定し、自分の考えを再構成する経験を多く積ませる。
- ③ 文学的文章の単元や取り立て指導等で表現技法の種類や効果について丁寧に指導する。
- ④ 学んだ表現技法を使って話したり、書いたりする学習活動を仕組む。
- ⑤ 図書館を活用した授業に更に積極的に取り組み、複数の資料を読み比べたり、必要な情報を読み取り、自分の表現に生かしたりする活動の充実を図る。
- ⑥ 説明する場を意図的に盛り込んだ授業づくりを推進する。

平成29年度 全国学力・学習状況調査結果（中学校：数学）

1 調査結果の分析

中学校：数学A

- 36問中、正答数が22問～28問（正答率61%～78%）の中間層が33.2%、29問以上の高位層の割合が30.5%であるため、平均正答率が83%になり、全国・県の平均正答率を上回った。
- 設問【14二】「相対度数を求める」は正答率が62.1%であり、全国・県平均より大きく上回っている。
- 設問【6（2）】「多角形の内角の和の求め方の理解」【8】「証明の仮定と結論の区別」【13】「関数を表す式と見れるか」の正答率が全国・県の正答率と比較して10%ほど下回っている。
- 正答数17問以下（50%未満）の割合が、24.6%であり、本町の学力向上に係る数値目標の一つである「全国調査A問題において50%未満の生徒の割合を10%未満にする」を達成できなかった。

中学校：数学B

- 設問別では、全国平均・県平均を上回っているのは15問中4問である。
- 正答数15設問中6問以下（正答率40%以下）の下間層が52.4%と全国・県平均よりも多い。また、12問（正答率80%）以上の高位層が7.5%で、14問以上は0%であった。
- 設問【1（3）】「図形の対称性を考える」、設問【5（1）】「必要な情報の収集と度数」では、全国や県平均と比べて9ポイント近く下回っている。

2 具体的な改善方策

中学校：数学A

- 1 正答率50%未満の層を減らすために
 - ① 習熟に応じた指導や個別指導の充実を図る。(授業形態の工夫やドリルタイム等)
 - ② 町独自で実施している数学確認テスト(年4回)に向けた取組及びその結果を生かした補充学習の充実を図る。
 - ③ 教科部会を開催し、評価問題の作成や指導方法の交流を実施する。
- 2 更なる基礎力の定着・向上のために
 - ① 指導事項を明確にした授業づくりを徹底する。
 - ② 町独自で実施している数学確認テスト(年4回)に向けた取組及びその結果を生かした補充学習の充実を図る。
 - ③ 問題データベースを活用する。
 - ④ 基礎的事項の定着を図る家庭学習の課題を計画的に与え、習熟を図る。

中学校：数学B

- ① 数値や文章を入れかえた多様な練習問題を繰り返し解かせる。
- ② 生徒から引き出した数学的な見方・考え方を共有したり、吟味したりする場を意図的・計画的に設定する。
- ③ 言葉、数、式、図、表などを用いたりして、自分の考えを書いたり、説明したりする活動を重視した授業づくりを推進する。
- ④ 活用力の向上を意図した家庭学習の課題を計画的に与え、生徒の思考の傾向や表現力の実態を把握し、授業づくりに生かす。
- ⑤ 生徒の実態や教材の系統性をもとに、各学年の単元における身につけさせたい活用力を明確にして授業を構想する。

【 玖 珠 町 】

平成29年度 全国学力・学習状況調査結果（児童・生徒質問紙）

1 調査結果の概要

児童質問紙

- 「国語」「算数」とも授業の内容がよく分かったと回答した児童が県・全国を上回っている。
- 「国語の勉強が好き」をはじめ、国語に関する回答で肯定的な回答をした児童が、全国・県平均を上回っているものが多い。
- 「自分の考えを発表する機会が与えられていたと思う」「学級の友達との間で話し合う活動をよく行っていたと思う」を肯定的に回答した児童は、全国・県平均を上回っている。
- これまで受けた授業で「授業のはじめに目標（めあて・ねらい）が示されていた」「授業の最後に学習内容の振り返る活動をよく行っていた」を肯定的に回答した児童は、全国・県を上回っている。
- 「学校の決まりを守っている」「友だちの前で自分の考えや意見を発表することは得意ですか」で肯定的な回答をした児童が全国・県平均を上回っている。
- 「毎日、同じくらいの時刻に寝ている」に肯定的な回答をした児童は、県・全国平均を下回っている。

生徒質問紙

- 「自分の考えを発表する機会が与えられていたと思う」「学級の友達との間で話し合う活動をよく行っていたと思う」を肯定的に回答した生徒は、全国・県平均を上回っている。
- 「学校の決まりを守っていますか」の問いに肯定的な回答をした生徒が全国・県平均を上回っている。
- 「読書が好きですか」に肯定的な回答をした生徒は、全国・県平均を6ポイント以上上回っている。
- これまでの授業で、学級の友達との間で話し合う活動をよく行っていたと回答した生徒は、全国・県平均を上回っている。
- 「家で、学校の宿題をしているか」「家で、学校の復習をしているか」に肯定的な回答をした生徒は、全国・県平均を上回っているが、「家で授業の予習をしているか」に肯定的な回答をした生徒は、全国・県平均を4～10ポイントほど下回っている。
- 「毎日同じ時間に寝る」「毎日同じ時間に起きる」に肯定的な回答をした生徒は、全国・県平均を5ポイント以上下回っている。

2 玖珠町の児童・生徒質問紙の調査結果をふまえて

- 児童・生徒のほとんどが、基本的な生活習慣を身につけ、落ち着いた雰囲気の中で学校生活を送っていることが見てとれる。
- 小・中学校において、先生方の「新大分スタンダード」を中心にした授業改善の取組が児童・生徒に実感として伝わっている。
- コミュニティ・スクール導入の成果の一つとして、地域貢献の取組を通して自分が地域社会の一員であるという自覚を児童・生徒に実感させている。
- 自己肯定感（自己存在感）を持たせるために、授業や特別活動をはじめとして、学校の教育活動全体の中で、生徒指導の3機能を生かした取り組みの充実が必要である。また、家庭や地域との連携の充実を図ることによって、児童生徒の自己肯定感を高めていく必要がある。
- 家庭での時間の使い方について、児童生徒個々の実態を丁寧に把握し、家庭と連携しながら個別に指導することと併せて、学校挙げて家庭学習の習慣化や充実を図る取組（例：家庭学習の方法の指導、家庭学習の記録やチェックの工夫、計画的・意図的な家庭学習用の課題の提示、家庭学習強化週間の設定等）を行うことによって、家庭学習の質・量ともに向上させる必要がある。
- 学校における教育活動全体を通して、児童生徒個々の表現力を向上させる取組（例：表現する中身をもたせ、説明する場を設定した授業改善、行事等における表現の場の設定と丁寧な事前・事後指導等）を充実させること、また、互いの考えを聴き合い、認め合う学校・学級の風土を創り上げていくことによって、表現力の更なる向上を目指す必要がある。

【 玖 珠 町 】

平成29年度 全国学力・学習状況調査結果（学校質問紙）

1 調査結果の概要

小学校：学校質問紙

本町においては、調査対象学校数が7校と少ないため、単純に全国平均・県平均の割合と比較して特徴を述べることは難しい面があるが、主なものとして以下の点があげられる。

- 全体的に見ると、肯定的な回答をした学校の割合が県・全国を上回っている項目が多い。また、57項目で全校が肯定的な回答をしている。
- 全学校が、授業の中で目標（めあて・ねらい）を示す活動を計画的に取り入れ、授業の最後に学習したことを振り返る活動を計画的に取り入れる活動はすべての学校が肯定的に回答しており、一時間完結型授業が定着している。
- 全小学校で、学習規律の維持を徹底して行い、「熱意を持った学習態度、授業中の落ち着き、礼儀正しさ、話を最後まで聞く」等の項目で肯定的な回答をしており、各学校の生活面に関する指導が浸透していると考えられる。
- 近隣中学校と、教科の教育課程の接続や教科に関する共通の目標設定など、教育課程に関する共通の取組を実施している学校が7校中2校に止まっている。

中学校：学校質問紙

本町においては、調査対象学校数が6校と少ないため、単純に全国平均・県平均の割合と比較して特徴を述べることは難しい面があるが、主なものとして以下の点があげられる。

- 全体的に見ると、肯定的な回答をした学校の割合が県・全国を上回っている項目が多い。また、53項目で全校が肯定的な回答をしている。
- 全学校が、学校全体の学力傾向や課題について、全教職員で共有できている。
- 全学校で「学習規律の指導」に取り組み、「熱意を持った学習態度、授業中の落ち着き、礼儀正しさ、話を最後まで聞く」等の項目で肯定的な回答をしている。生徒質問紙からも規範意識が高い結果が得られており、各学校の生活面に関する指導が徹底している。
- 授業において、生徒自ら学級やグループで課題を設定し、その解決に向けて話し合い、まとめ、表現するなどの学習活動を取り入れていると回答した学校が6校中3校に止まっている。
- 近隣小学校と授業研究など合同の研修はできているが、教育目標を共有する取組や教育課程に関する共通の取組を行っている学校が半数以下である。

2 玖珠町の学校質問紙調査の結果をふまえて

1 思考力・表現力の向上を目指した更なる授業改善

「新大分スタンダード」に基づく組織的な授業改善による授業の質の向上を目指し、児童・生徒自らが調べ、整理し、発表・交流する問題解決的な展開の授業を積極的に行う必要がある。その際、特に、児童・生徒個々の多様な考えを引き出す学習課題の設定とそれぞれの考えを比較・吟味する話し合い活動の質の向上に留意しなければならない。

2 家庭学習の充実と補充指導の見直し及び一層の充実

学校挙げて家庭学習の習慣化や充実を図る取組（例：家庭学習の方法の指導、家庭学習の記録やチェックの工夫、計画的・意図的な家庭学習用の課題の提示、家庭学習強化週間の設定等）を行うことによって、家庭学習の質・量ともに向上させる必要がある。特に、中学校においては、教科間の連携を確実にを行い、全教職員が家庭学習の課題のあり方についての共通認識をもって提示するよう配慮することが肝要である。

3 学校間の連携の強化

小中連携、また、同校種間の連携を深め、9年間を通して共通して指導する内容の焦点化や有効な指導方法の共有等を行うことによって、教職員の更なる指導力の向上を図りたい。